

# 心理学と科学方法論： ポパーと二人の心理学者（K. ビューラー，A. アドラー）\*

立花 希一（秋田大学）

## On the Relationship between Psychology and Methodology of Science: Popper and Two Psychologists (Karl Bühler and Alfred Adler)

Kiichi TACHIBANA

### Abstract

There were two psychologists, Karl Bühler and Alfred Adler, who had taught Popper. Popper rarely confessed his intellectual debt, but he exceptionally said that he owed to Karl Bühler. On the other hand, Popper condemned Adler's Individual Psychology as a pseudo-science. However, as we read Adler, we are surprised to find that Popper was greatly influenced by Adler in various points such as the logic of social situation, optimism, the regulative idea of the absolute truth, the view of science as modified commonsense and so on. Popper accepted Bühler's psychology of learning. Viewing from these contexts, it seems to us that Popper's thought was not original at all. However Popper changed the psychology of learning into the logic of scientific learning and proposed falsificationist methodology of science. His originality is found in this point.

キーワード：ポパー思想の知的背景，学習心理学，個人心理学，心理学の危機，科学方法論

Key words: Intellectual Background of Popper's Thought, Psychology of Learning, Individual Psychology, The Crisis of Psychology, Methodology of Science

### I. はじめに

この研究テーマの選択には、二つの問題関心が大きくかかわっている。一つは思想史的な関心である。ポパーの唱える「批判的合理主義」では、英国の経験論、大陸の合理論を含んだ形態の「急進的合理主義 (radical rationalism)」とは異なり、知識の源泉として「理性」とか「経験」といった個人の認識能力、器官に限定せず、「伝統」- といっても絶対に確実な知識の源泉という意味ではないが- を知識の有力な源泉として挙げている<sup>1</sup>。「伝統」をポパーは、「背景知識」とも呼んでいる<sup>2</sup>が、この「批判的合理主義」の立場に立つと、ある哲学者ないし思想家の思想を知る、あるいは理解するには研究者が、自分の「理性」と「経験」を用いるだけでは不十分

であり、当該の思想家の「伝統」ないし「背景知識」に照らしてその思想家の思想を考察する必要があるということになるはずである。これをポパー哲学の研究に適用すると、ポパーの哲学をかれの「批判的合理主義」の立場から研究するには、かれの背景、伝統に照らして研究しなければならないということになるだろう。

ところが、ポパー自身についていうと、かれは自分の知的影響についてひどく公正さを欠いているような印象を受ける。ポパーは自分の独創性、先取権を主張するあまり、自分がどのような知的伝統に属し、先人からどのような知的恩恵を受けたのかについてほとんど語っていないからである（だからこそかえって研究意欲に駆り立てられるともいえるのだが）。

私の恩師でポパーの弟子だった J. アガシによると、

\* 本稿は、「K. ポパーと二人の心理学者：K. ビューラーと A. アドラー」という題目で、1988年3月、日本イギリス哲学会第12回大会（横浜国立大学）で口頭発表した原稿に加筆・修正を加えたものである。後で述べるように、ポパーに大きな影響を与えたことが判明した、ビューラーの著作『心理学の危機』を今年になってようやく入手したので、遅ればせながら、論文としてまとめることにした。

1 K. R. Popper, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, Routledge, 1972 (1963), pp. 27-8.

2 *Ibid.*, p. 238.

一般的にいて、新しい思想というものは初めて唱えられた段階では往々にして理性に反するとして退けられ、次に既成の宗教に反するとして退けられるが、この二つの反対を克服すると、今度は時代遅れのものとみなされてしまうが、ポパーの哲学は今や第二から第三の段階へ移行しつつあるという<sup>3</sup>。そしてポパーの哲学を思想史的に跡づける試みが行われつつあるというのである。時代遅れともみなされるかもしれないが、逆にいえば、ポパーの哲学が普及し、受け容れられるようになったともいえるであろう。もしポパーの思想が却下されたつまらない思想なら、それを思想史的に跡づけようとする研究者が生まれ、育つなどということはないだろうからである。この研究はこうしたポパー研究に沿った一つの試みである。

もう一つは、理論的な関心である。1962年にT. クーンの『科学革命の構造』が出版されて以来、科学方法論と科学史との関係はどうなっているのだろうかという問いが、科学哲学上の問題の一つになっているが、この問題はさらに、個別科学と哲学（知識論、科学方法論）との関係という問題にもなり、例えば、科学社会学、生物学（特に進化論）、心理学などと科学方法論との関係について議論が行われている<sup>4</sup>。

これらの問題の全体に取り組み、その解決の試みを行うことは私の能力を超えているので、ここでは、ポパーが自らの哲学、特に科学方法論を築き上げていくうえで、まず、心理学を学び、そこから方法論の提唱へと移行していったという歴史的事実を踏まえ、かれの学んだ心理学と科学方法論との関連を考察することにしたい。

## II. アルフレート・アドラー（1870～1939年）

ポパーにとっての科学哲学（認識論）の二大根本問題の一つは、境界設定の問題－科学（science）とエセ科学（pseudo-science）を区別する問題－であった<sup>5</sup>。20

世紀初頭に有力だった四つの理論、アインシュタインの重力理論、マルクスの歴史理論、フロイトの精神分析、アルフレート・アドラーの個人心理学のうち、アインシュタインの理論だけをポパーは科学的な理論とみなしたのである。

ポパーは、アドラーに関する次のようなエピソードを引き合いに出して、アドラーの理論をエセ科学だと決めつけている<sup>6</sup>。

アドラーについていえば、私は、ある個人的な体験を忘れることができない。1919年のある日、アドラーの理論では説明できないと思われた一事例をかれに報告した。ところが、かれは、その子どもを見たこともないのに、かれの劣等感理論によって事もなげに分析しきった。いささかショックを受けて、私はどうしてそれほど確信がもてるのかと尋ねたところ、「こんな例は千回も経験しているからだよ」とかれは答えた。そこで私は次のようにいわざるをえなかった。「ではこの新しい事例であなたの経験は千と一回になったわけですね」と。

ポパーの叙述する文脈でのみアドラーをみる人は、ポパーがアドラーからいかに大きな影響を受けていたかを看過することになるだろう。私もその例外ではなかった。ところが、アドラーの著書の一つとされる *Understanding Human Nature* を留学先のテルアヴィヴ大学図書館で読んで<sup>7</sup>、筆者は驚きを隠せなかった。ポパーの思想の萌芽がアドラーの言明の中にすでに見られるのである。それらを順次、列挙する前に、アドラーの心理学についての一定の評価について述べておきたい。アドラーの心理学に関する体系的な研究書である、H. L. Ansbacher and R. R. Ansbacher eds., *The Individual Psychology of Alfred Adler* の中では、こう述べられている。「アドラーの心理学は、今日なら社会学的方向と呼ぶべき分野

3 J. Agassi, *Science in Flux*, Reidel, Dordrecht, 1975, p. 51.

4 以下の文献を特に挙げておきたい。Thomas S. Kuhn, *Logic of Discovery or Psychology of Research?*, in *The Philosophy of Karl Popper*, ed. by Paul Arthur Schilpp, Open Court, 1974, pp. 798-819. Berkson & Wettersten, *Learning from Error: Karl Popper's Psychology of Learning*, Open Court, 1984. *Evolutionary Epistemology, Rationality, and the Sociology of Knowledge*, ed. by Gerald Radnitzky and W. W. Bartley, III, Open Court, 1987. John R. Wettersten, *The Roots of Critical Rationalism*, Rodopi, 1992. Michel ter Hark, *Popper, Otto Selz and the Rise of Evolutionary Epistemology*, Cambridge University Press, 2004. ポパー生誕100年を記念してウィーンで開催された国際学会の発表論文の中から厳選されて刊行された論文集では、「生物学」というジャンルが設けられ、そこでは、生物学と認識論、科学方法論との関係等を考察した4本の論文が掲載されている。Ian Jarvie, Karl Milford, and David Miller, eds., *Karl Popper: A Centenary Assessment*, Vol. III, Ashgate, 2006, pp. 123-62.

5 Popper, *op.cit.*, pp. 33-37.

6 *Ibid.*, p. 35.

7 Alfred Adler, *Understanding Human Nature*, Martino Publishing, 2010 (1927). 引用ページについては、2010年に日本で入手したものを用いる（近年、アドラーの主要著作は、その複製版が出版され、容易に入手可能になっている）。

で展開された、心理学史上最初の心理学体系である」と<sup>8</sup>。最初であるかどうかは別として、社会学的な性格をもった心理学であることは、『オーストリアの精神』の著者であるジョンストンやポール・F・ラザルスフェルトなどによっても述べられている<sup>9</sup>。ラザルスフェルトによれば、アドラーがフロイトに反対する大きな理由の一つが、アドラー心理学のもつ強い社会学的色合いであり、かれもその一人であるが、それに魅力を感じた人が多かったという。

先に言及した著作の中で、アドラーは次のように述べている<sup>10</sup>。

個人の性格はかれの状況においてみる時にだけ理解でき、世界におけるかれの特殊な状況においてかれを判断できるということを示そうとわれわれは詳細に論じてきた。・・・人間を社会的な存在者 (social being) として扱うことの必要性を理解することがわれわれの研究にとって不可欠な結論である。ひとたびこれを把握すれば、人間の行動の理解にとって重要な特性を得たことになる。

この考えは、人間の心理が社会学的分析なしには捉えることができないという社会学の自律性あるいは社会学の心理学に対する優位として、『開かれた社会とその敵』で述べられたポパーの思想に受け継がれている<sup>11</sup>。

以下、類似点をみていくことにしよう。

### (1) 問題解決および状況の論理

アドラーは次のように述べている<sup>12</sup>。

人間の精神は、自由勝手な行為者として振る舞うことができない。なぜなら問題が絶えず生じており、そうした問題を解決する必要性がその人の活動の方向を決めるからである。こうした諸問題は人間の共同生活の論理 (the logic of man's communal life) と分かちがたく結びついている。

この発言は、ポパーの人間を含むすべての生物は「絶えず問題解決にたずさわっている」という発言<sup>13</sup>と一致するものであるし、「共同生活の論理」は、ポパーの『開かれた社会とその敵』や『歴史法則主義の貧困』で考察されている「社会状況の論理 (the logic of social situation)」, 「状況の論理 (situational logic, the logic of situations)」に連なるものであるといえるであろう<sup>14</sup>。

### (2) 誤謬排除による真理接近説

アドラーは次のように述べる<sup>15</sup>。

われわれの共同生活を律する、現存する諸条件は最終的なものとは考えられない。そうした諸条件はあまりにおびただしく、かなりの変化や変形を受けるものである。・・・こうした窮地にあつてわれわれがとる措置は、・・・われわれの不完全な組織や人間としてのわれわれの有限の能力から生ずる失敗や誤りを克服することによって一歩一歩接近することのできる究極的で絶対的な真理があると想定することである。

この考え、特に傍点の考えは、ポパーの規制的観念としての真理および誤謬排除による真理への接近という考えと軌を一にしている<sup>16</sup>。

<sup>8</sup> H. L. Ansbacher and R. R. Ansbacher eds., *The Individual Psychology of Alfred Adler*, Harper & Row, 1964 (1956), p. 126.

<sup>9</sup> William M. Johnston, *The Austrian Mind*, University of California Press, 1972, p. 256. Paul F. Lazarsfeld, An Episode in the History of Social Research: A Memoir, *The Intellectual Migration*, edited by D. Fleming and B. Bailyn, Harvard University Press, 1969, p. 272.

<sup>10</sup> Adler, *op. cit.*, pp. 42-3. ポパーの後期の著作、『自我とその脳』（エクルズとの共著であるがポパーの著作部分）で、ポパーは、フロイトに言及し、自分は精神分析にはきわめて批判的であるが、フロイトが、社会的経験の意義を強調したことは正しかったと認め、「子どもは自分に関心を引きつけようと能動的に試みるが、それはこの〔社会経験〕学習過程の一環である」と述べているが、これはフロイトの思想ではなく、アドラーの思想であろう（この著作では、アドラーは一度も言及されていないが）。Karl R. Popper & John C. Eccles, *The Self and Its Brain*, Springer, 1977, p. 110.

<sup>11</sup> Karl R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Routledge, Golden Jubilee Edition, 1995 (1945), pp. 319-29. 要するに、「そもそも還元が試みられるべきだとするならば、心理学を社会学の観点から還元しようとしたり解釈しようとしたりする試みの方が、この逆の試みよりも有望であろう」（p. 323）と。

<sup>12</sup> Adler, *op. cit.*, p. 26.

<sup>13</sup> Karl R. Popper, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Oxford University Press, 1974 (1972), pp. 242-3.

<sup>14</sup> Karl R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, pp. 327-8, Karl R. Popper, *The Poverty of Historicism*, Routledge, 2002 (1957), pp. 138-40.

<sup>15</sup> Adler, *op. cit.*, pp. 26-7. 傍点、引用者。

<sup>16</sup> Popper, *Conjectures and Refutations*, pp. 223-37.

### (3) 科学における批判的方法の意識的使用

これについては、個人が自分の個人的な生活様式 (individual life pattern) を、誤りを認めずに独断的に強化しがちであることと対比させて、アドラーは次のように述べている<sup>17</sup>。

〔自己の生活様式の〕強化 (reinforcement) は、われわれがあらゆる知覚を何らのテストも行わずに、受け取り、変形し、われわれの意識の影ないしは無意識の深みの中に同化してしまうことによってのみ可能になる。科学だけがその〔独断的強化の〕過程に光をあて理解をもたらす。科学だけが最終的に誤謬を修正することができるのである。

この考えは、ポパーの「独断的思考」と「批判的思考」の区別とも対応している<sup>18</sup>。

### (4) 楽観主義と悲観主義

ポパーの知識論におけるかなり重要な概念として、楽観主義と悲観主義の区別がある。この概念が重要なことは次のポパーの発言からわかるだろう。ポパー哲学を非決定論の観点から包括的に把握しようとするワトキンスの試みに対して、次のように語っている<sup>19</sup>。

私は私の哲学の「統合」をやや異なった仕方で見ている。批判主義の強調（あるいは批判的実在論あるいは批判的楽観主義の理論）の方が非決定論より私の理論的かつ実践的な思考の統合にとってより適切だという気がする。

この楽観主義と悲観主義とは、アドラーによる子どもの行動の分析にとって重要な二つの概念である。アドラーは、子どもたちが困難に直面した時の状況を次のように分析する<sup>20</sup>。

子どもが直面する問題を容易に解決できるという自信をもてるような楽観主義の道がある。そのような状況にある子どもは、人生の課題は自分の能力の内にあ

ると考えるような特性をもって成長するだろう。こうした子どもの事例では、勇気、寛大、率直、責任感、勤勉といった発達をみる。この反対が悲観主義の発達である。問題を解決できる自信のない子どものもつ目標を考えてみよう。このような子どもには世界が何と暗いものにみえるであろう。この場合には、臆病、内向性、不信、その他、弱い者が自己弁護しようとする時の特性や特色を見いだすことになる。

### (5) 常識批判から生まれる科学

最後に次の文章を引用したい。

われわれの中の誰も絶対的な真理の知識をもつという恩恵に浴していない。われわれの科学でさえ絶対的真理の恩恵には浴していない。科学は常識に基づいている。すなわち科学は絶えず変化しており、大きな誤りを小さな誤りへと漸進的に取り代えていくことに満足するのが科学なのである。われわれは誰でも誤りをおかすが、もっとも重要なのはわれわれには誤りを正せることである。

この文章を読んだら、それはポパーのものと考えられるひともいるのではなからうか。ところがこの文章もアドラーのものである<sup>21</sup>。あきれほどの一致である。

アドラーは患者の治療を最大限に重視する実践家であり、体系的な心理学者ではなく、また哲学者でもなかった。それに対して、ポパーは自分の思想の一貫性、包括性をめざした体系的な哲学者である。しかしながら、人間、社会、世界および知識についての基本的な見方、大袈裟に言えば、世界観・人間観をポパーはアドラーから学んだのではなかったか。またポパーの独創とされる反証可能性や真理接近説の芽もすでにアドラーの思想の中にあり、それをポパーが開花させたともいえるのではなからうか。

冒頭で、ポパーによるアドラーへの皮肉を引用したが、ポパーがアドラーに対して、あなたのやっていることはエセ科学であると直接に批判したとは到底考えられない<sup>22</sup>。しかし、もし「エセ科学」だと言われたとしたら、

17 Adler, *op. cit.*, pp.82-3.

18 Paul Arthur Schilpp, ed., *The Philosophy of Karl Popper*, Open Court, 1974, pp. 34-5.

19 *Ibid.*, p. 1053.

20 Adler, *op. cit.*, p. 25. 同書の別の個所の発言も注目に値する。「人間を分類するもう一つの案 (scheme) がある。その基準とは、人間が困難に対処する仕方である。まず、楽観主義者である。・・・かれらはあらゆる困難に勇気をもってアプローチし、困難をそれほど深刻には受け取らない。・・・それとまったく異なるタイプが悲観主義者である」と (p. 174)。

21 Alfred Adler, *The Science of Living*, Meredith Press, 2007 (1929), p. 36.

22 ポパーとアドラーのこのやりとりは、科学と非科学の境界設定基準としての反証可能性がまだ定式化される以前のことで、後知恵による適用なのだが、ポパーは、アドラー理論をエセ科学としてではなく科学理論とみなして、反証を試み、

アドラーは、何と答えたであろうか。その返答を推測できるアドラーの言明がある<sup>23</sup>。

個人心理学の中に一片の形而上学を見いだす人々は正しいということを私は認めなければならない。このことを賞賛する者も、また批判する者もいる。残念なことに、人々の中には形而上学について誤った見解をもっている人がおり、人類の生活からあらゆる形而上学が除去されるのを見たいと思っている人々が多い。しかし、もしそうなるとすれば、われわれは発展の可能性、あらゆる新しい思想を阻止することになるだろう。あらゆる新しい観念は直接経験を越えたところにある。逆にいうと、直接経験はけっして新しいものをもたらさない。直接経験のデータを結びつけるのは総合的な観念だけである。それを思弁と呼ぼうが先験論と呼ぼうが、形而上学の領域に足を踏み入れない科学というものはないのである。私には形而上学を恐れる理由がわからない。形而上学は人間の生活とその発展に多大な影響を与えているのである。われわれは絶対的な真理を所有するという恩恵に浴していない……そうであるからこそ、われわれはわれわれの将来についてわれわれの行為の結果について自分自身で諸理論を作らなければならないのである。

この発言は後期のポパーの形而上学に対する態度と一致する。初期の『探究の論理』（1935年）では、ポパーは論理実証主義者のように形而上学を無意味とはみなさなかつたとしても、科学より一段低いものとみなしていた。先に、境界設定の問題を科学とエセ科学との区別の問題であると述べたが、それは、『推測と反駁』におけるポパーの発言に基づくものであって、『探求の論理』の英語版『科学的発見の論理』では、正確には、経験科学と科学ではないもの（数学、論理学、形而上学を含む）の区別の問題であった<sup>24</sup>。そして、初期のポパーにとっては、科学が真正の知識であったために科学以外の知識はエセであるとみなす傾向が顕著であった。ところが、

1982年に出版された『科学的発見の論理』の『補遺』三巻本では、そのような評価的区別をしないばかりか、形而上学を積極的に評価し、「形而上学的研究プログラム」と称して、それを自らの哲学の中に取り込んでいる。すなわち、アドラーのほうが、ポパーの後期の思想を先取りしているともいえるのである。そもそも科学とは何かについて答えることは実はとても困難なのだが<sup>25</sup>、仮にポパーの規準を受け容れて、アドラーの心理学が科学ではないと仮定しよう。その時でさえ、アドラーがポパーの規準を受け容れなければならないとは必ずしもいえない。したがって、アドラーによるポパー規準の受容というのは奇妙な想定ではあるが、もしアドラーが自分の心理学は科学であると主張したとすれば、かれの心理学は「エセ科学」と断定することは可能であるかもしれない。しかしながら、アドラーの発言からわかるように、かれは自分の心理学が全面的に科学であるとは主張していない。科学でないものが科学であると僭称したら、それはエセ科学になるだろうが、アドラーはまったくそのようなことをしていないので、アドラーの心理学はエセ科学とはいえないであろう。

ポパーは、知識の成長、進歩の問題が科学哲学の中心問題であるとも述べているが、知識の進歩という観点から考えると、後期のポパーが形而上学を重視するようになったことが理解でき、またアドラーの先の発言も正当だということになるだろう。しかしながら、そうすると境界設定の問題と知識の進歩の問題が衝突する場面も出てくる可能性がある。この問題についての具体的な検討は別の機会に譲りたいと思う。いずれにせよ、ポパーによるアドラー心理学がエセ科学であるという断罪は尋常ではない。

アドラーはビューラー夫妻との思想上の近親さを強調して、個人心理学がゲシュタルト心理学と多くの考えを共有していると論じたが、個人心理学の理論家であるアンズバッハー夫妻は、先に言及した編著書の中でゲシュタルト心理学と個人心理学のいくつかの類似点を具体的に挙げている。先に述べた個々の人間を第一義的に社会

---

反証事例を提出してアドラーを批判したと仮定した場合でも、次のような結果もありうる。ポパーの反証事例は実は反証事例にはなっておらず、アドラーがそれをうまく説明できたのは、そのためであり、したがって、アドラー理論は検証された (corroborated) のだと。しかしながら、ポパーは、反証事例を具体的に述べていないので、この問題に決着をつけることは不可能である。しかも、このエピソードをポパーが公表したのは、アドラーとのやりとりの34年後の1953年、アドラーの死後であった。

<sup>23</sup> Alfred Adler, Über den Ursprung des Strebens nach Überlegenheit und des Gemeinschaftsgefühles, *Internationale Zeitschrift für Individual Psychologie*, July-Aug., 1933, S.257-263. 本文の訳は、この論文が掲載されている上記の雑誌論文をテルアヴィヴ大学留学中に読んで、必要な箇所を翻訳し書き留めていたメモによる。

<sup>24</sup> Karl R. Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson, 1972 (1959), p. 34.

<sup>25</sup> ポパーの弟子のアガシでさえも、ポパーによる科学と非科学の境界設定には間違いがあると主張していることから、その困難さは理解できるであろう。Joseph Agassi, Popper's Demarcation of Science Refuted, *Methodology and Science*, 24, 1991, pp.1-7.

的存在者とみなす見方もその一つだが、ここでは、ポパーも共有し、しかも強力に主張している点の一つだけ紹介しよう。

アンスバッハー夫妻は、アドラーが、「見ようとする性向、嗅ごうとする性向、聞こうとする性向 (the drive to see, the drive to smell, the drive to hear)」といった用語を用いていることに言及し、次のように述べている。

見ようとする性向、嗅ごうとする性向、聞こうとする性向、すなわち、感覚の機能 (sensory functions) がダイナミックな性質をもつものとして理解されていることを知って、読者は驚くかもしれない。・・・感覚的性向 (sensory drives) という概念は、カール・ビューラーの機能的悦楽 (Funktionslust)<sup>26</sup> という概念やゴルトシュタインの自己実現 (self-actualization) という概念とぴったり一致している。

ポパーは、(能動的) 刺激に対する (受動的) 反応によって反射を説明する条件反射理論や無条件反射理論を批判する際に、次のように述べている<sup>27</sup>。

[瞳孔反射などの]無条件反射は、器官—この場合は、眼—の遺伝的に決定された機能 (function) の一部であるが、それは、その器官が、理論と同様に、何らかの問題、すなわち、変化する環境への適応の問題を解決するという観点からのみ理解可能である。・・・われわれの器官は問題解決者である。事実、すべての生物は高度に能動的な (active) 問題解決者である。

また別の個所だが、ポパーは、「[人間の行うさまざまな挑戦が脳の中だけで生じているという]私の仮説は、脳に依存する実質的にほとんどすべての解釈が、単にいわば、何らかのメカニズムによって行われているということではなく、そうした解釈は、脳に組み込まれた要求ないし性向、すなわち、能動的であろうとする要求や、行為を遂行する喜びを経験しようとする性向 (drive to experience the enjoyment of performing the action) によって支えられているということである」と述べ、そ

の脚注で、ビューラーが、「Funktionslust (機能的悦楽)」についてよく発言していたと言及している<sup>28</sup>。

要するに、感覚器官ですら、(受動的ではなく) 能動的なものであり、その機能を発揮して、問題解決に携わっており、しかもそれに喜びを感じているというのである。アドラーの影響を多分に受けているポパーがビューラーの思想に接近したのは当然の成り行きであったともいえるであろう。それではもう一人の心理学者、K. ビューラーとポパーの関係について考察することにしよう。

### Ⅲ. カール・ビューラー (1879～1963年)

ポパーはシルプ編『カール・ポパーの哲学』の「知的自伝」の中で次のような書き方をしている<sup>29</sup>。

私の見解は、オスヴァルト・キュルペとその学派 (ヴェルツブルグ学派)、特にビューラーとオットー・ゼルツの見解に似ているのがわかった。われわれはイメージにおいて思考するのではなく、問題とその暫定的解決という見地から思考するのである、ということに彼らは気づいていた。私の結論のあるものが、特にオットー・ゼルツによって、すでに先取りされていたのを知ったことは、私が心理学から離れる小さな動機の一つだったろうと思う。

この書き方からすると、ポパーは彼らとは独立に自分の見解を確立し、後になって同様の見解であることに気づいたかのような印象を受ける。

ポパーは、彼らから影響を受けたのか、それとも独立に同様の見解をもつに至ったのだろうか。その答えは、同書の「わが批判者への返答」の中でポパー自身が語っている。自分の影響についてポパーが語ったのはこれが初めてであろう。「影響に関していえば、[ウィーン] 学派のどのメンバーからよりも、心理学者でキュルペ学派のメンバーであるカール・ビューラーからいっそう強く影響を受けたと思う」と<sup>30</sup>。

それでは、ポパーはビューラーから何を学んだのであ

<sup>26</sup> ここでは、「機能的悦楽」と訳したが、ドイツ語の Funktionslust という用語は、翻訳困難な言葉である。この用語に言及したポパーは、英語で、drive to experience the enjoyment of performing the action (行為を遂行する喜びを経験しようとする性向) で説明している。さらに説明を加えれば、人間に備わっているいろいろな機能を能動的な意欲によって働かせようと努め、しかもそうやって働かせること自体に喜びや楽しみを味わうという含蓄のある人間の心理を、一言で表現したものだということになるだろう。

<sup>27</sup> Popper & Eccles, *The Self and Its Brain*, p. 138.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 436. これは、アドラーの心理学の核心ともいえる主張である。

<sup>29</sup> Schilpp, *op. cit.*, p. 60.

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 975-6.

ろうか。ビューラーの心理学への貢献は多岐にわたるが、ポパーの思想に関連するものだけを取り上げて考察することにしたい。内容に入る前に先ず目につくのは、ビューラーの批判的態度である。これが私だけの印象ではないように思われるのは、アメリカの心理学者、ヘンリー・J・ヴェグロッキーらも次のように述べているからである<sup>31</sup>。

ビューラーは、他人の思想に対してであって決してその個人自身に対してでなければ、論理の剣によって攻撃したり、かわしたりした。さらには敵意ともいえる感情の充足感をもって致命的な最後の突きを行うこともできたのである。

ポパーの論争における辛らつさはこのビューラーの態度から学んだのかもしれない<sup>32</sup>。因みに、ビューラーはクルト・コフカと、「ゲシュタルト」の概念をめぐって先取権争いをしており、ポパーもその論争に参加しているが、ポパーの後の先取権に対する執着はこの時、培われたのかもしれない。以下、主として、ブーゲンタールらの行ったシンポジウム「カール・ビューラーの心理学への貢献」から生まれた論文とビューラーの著作『心理学の危機』を参照しながら、ポパーとビューラーの関連を見ていくことにしたい<sup>33</sup>。

### (1) 思考心理学

ポパーの専門というまでもなく数学と物理学であると考えられているが、実際にはそうではなく、ポパーはビューラーの指導の下で、教育学と心理学を学んだ。1927年にウィーン市立教育研究所に提出した未完の論文（未公刊）は、『教育における「習慣」と「法則体験」』という題であり、1928年にウィーン大学の哲学部の学位取得のために提出した論文（未公刊）の題は、『思考心理学の方法の問題』であった<sup>34</sup>。

ビューラーは、思考心理学のパイオニアとして知られ

ている。ビューラーの貢献は、感覚やイメージや感情に還元されない「思考」という要素、すなわち、「イメージなき思考」の発見であった。この発見は、物理学の方法を模倣して、思考を単純な原子論的単位に還元し、観念の連合によって思考を構成しようとするヴント学派の心理学と相容れなかった。『心理学の危機』の個所で考察するように、ビューラーは、連合心理学を批判していた。

ロック、パークリー、ヒュームの認識論を「心のバケツ理論」と呼んで、ポパーは批判しているが、その根はこのビューラーの思考心理学にあったのである。

またビューラーは、思考は環境に適応する際に必要な機能であり、したがって生物の適応の表現であるという進化論的アプローチ（物理学的アプローチと対比される生物学的アプローチ）を採用している。このアプローチもポパーによって採り入れられていることはいうまでもない<sup>35</sup>。

### (2) 発達心理学

ビューラー夫妻のウィーン心理学研究所は児童心理学の研究の焦点であり、世界中の心理学の大学院生を惹きつけた所であった。1937年にパリで開催された国際心理学会議には十七カ国からその研究所のかつての学生が集まったという。

この分野でポパーが学んだことは、(生得的)性向の存在と試行錯誤による問題解決過程であった。またビューラーにとって、人間の精神においては「創造性」と「超越」が重要な概念である。生物学的進化の中で出現した「心」は、生物学的組織の中に埋め込まれているが、つねにそれを超越し、創造的であるというビューラーの見方もポパーは継承している<sup>36</sup>。

### (3) ビューラーの『心理学の危機』<sup>37</sup>

この著作は、当時の心理学が統一 (Einheit) されて

<sup>31</sup> J. F. Bugental, Henry J. Wegrocki, Gardner Murphy, Hans Thomae, Gordon W. Allport, Rudolf Ekstein, and Paul L. Garvin, Symposium on Karl Bühler's Contributions to Psychology, *The Journal of General Psychology*, 75, 1966, p. 181.

<sup>32</sup> 1992年の京都賞受賞記念講演に出席した筆者は、ポパーがまさにこの「論理の剣」を用いて、講演者の一人、竹内啓氏を打倒したのを目撃した。

<sup>33</sup> 以下の記述は、『心理学の危機』に関する箇所以外は、すべて、ブーゲンタールらの論文に依拠している。pp. 181-219.

<sup>34</sup> K. R. Popper, 'Gewohnheit' und 'Gesetzlerlebnis' in der Erziehung, 1927, *Zur Methodenfrage der Denkpsychologie*, 1928.

<sup>35</sup> ポパーの次のような発言からも進化論的アプローチの採用は明白である。「我々は自我についてある程度知ることができ。・・・知識は観察に基づいているとは限らない。前科学的知識も科学的知識も主として行為や思考、問題解決に基づいているのだ」、「自我の能動性、自我意識の能動性は、その自我や自我意識が何を行うのか、どんな機能を遂行するのかという問題へとわれわれを導き、したがって、自我に対する生物学的アプローチへと導く」。Popper & Eccles, *The Self and Its Brain*, pp. 108-9. さらに, *Evolutionary Epistemology, Rationality, and the Sociology of Knowledge*, ed. by Gerald Radnitzky and W. W. Bartley, III, Open Court, 1987 参照。

<sup>36</sup> Popper, *Objective Knowledge*, pp. 146-50.

<sup>37</sup> Karl Bühler, *Die Krise der Psychologie*, Ullstein, 1978 (1927).

いないことを「構造的危機 (Aufbaukrise)」として捉え、それを克服する試みである。すなわち、1890年代まで大きな影響力をもっていた連合心理学、1890年代から20世紀にかけての新たな運動である行動主義心理学、思考心理学をビューラー独自の言語理論と関連づけて、その統一を図るものであった<sup>38</sup>。

この著作の中で、ビューラーは、連合心理学批判という大きな運動を説明し評価しているが、これはマッハ流の「感覚の分析」に対抗する新たな運動によるものであったという<sup>39</sup>。ビューラーは、感覚が中立的だとするマッハの解釈を誤りだとみなしており、要素心理学 (Elementenpsychologie) と感覚主義 (Sensualismus) を同列に並べている<sup>40</sup>。ポパーの批判は次の通りであるが、まさにビューラーの見解を踏まえたものになっている<sup>41</sup>。

中立的一元論者は、普通、要素 (elements) を印象、観念、感覚のようなものとして捉えている。マッハの「感覚 (Empfindungen)」という用語—こうした要素を表すかれの用語—もおそらく、「感覚 (sensations)」(あるいは「感情 (feelings)」) と訳しうるであろう。…中立的な要素だと申し立てられているものは、ただ「中立的」と呼ばれているだけであって、それが心的 (mental) であることは避けられず、したがって、明らかに、物理的対象を「構成」する手続きとなっている。かくして、「中立的」一元論は名目にすぎない。

実際には、それは、かなりの程度、パークリー流の主観的観念論なのである。

『心理学の危機』の中で注目すべきことは、「理解」の問題に対するビューラーの共感的ではあるが慎重な評価であり、ディルタイやその弟子、E・シュブランガーの立場がもつばらヘーゲルの客観的精神 (Objektiver Geist) の理論に依拠しているというビューラーの指摘である<sup>42</sup>。ポパーは、『客観的知識』の中でディルタイに言及しながら、「理解の問題」を取り上げ、大幅な修正を加えてはいるものの、ヘーゲルの客観的精神という考えを用いている<sup>43</sup>。ポパーは、ビューラーのどの著作を読んだのかについて言明していないが、この『心理学の危機』は、精神分析批判も重要な部分であり、ポパーがビューラーの著作を読んだ可能性は非常に高いといえるだろう<sup>44</sup>。

#### (4) フロイトの精神分析について

まず注目すべきこととして、ビューラーが人間の能力を発生点からというより問題解決点から考察することや、心理学の応用を治療よりも教育に用いることを選んだことを挙げておきたい。このことはビューラーと精神分析の関心の違いを如実に表している。

先に述べたように、『心理学の危機』のもう一つの側面は、精神分析批判にあった。四章だてからなる本書の一章を「精神分析批判」に割いているほどである。ルド

<sup>38</sup> *Ibid.*, S.1-28. ビューラーが描いた心理学の状況は1920年代のものであるが、この事情は20世紀後半になってもあまり変わらなかった。ノッターノは、フロイト派、アドラー派、ユング派、ワトソン派、スキナー派などに言及し、次のように述べている。「さまざまな学派の心理学者たちは、相互に異なるパースペクティブから研究を行い、あまりに異なる方法やテクニックを用いるので、学派間のコミュニケーションがしばしば不可能と思われるほどである」と。Mark Amadeus Notturmo, *Objectivity, Rationality and the Third Realm: Justification and the Grounds of Psychologism*, Nijhoff, 1985, P. 196. この状況は、21世紀になっても同様である。「パラダイム放棄は科学の放棄」とみなすパラダイム理論によれば、パラダイムを共有していない心理学は、科学の前段階でまだ科学ではないということになるかもしれない。Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, The University of Chicago Press, 1996 (1962), Chap. 4, 特に p. 34. しかしながら、コミュニケーションが本当に不可能ならば論外だが、さまざまな学派が何らかの問題 - パラダイムによって与えられるパズルではない - を共有することができれば、問題解決の競合が生まれることによって、よりよい解決策が発見されるかもしれない。したがって、複数の学派が存在することは、真理探究には、むしろ望ましい事態かもしれないのだ。ポパーの用語では、様々な学派に属する多くの科学者間の「友好的・敵対的協力 (friendly-hostile co-operation)」である。Karl Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Routledge, 1966 (1945), Vol. 2, p. 217.

<sup>39</sup> Bühler, *ibid.*, S. 2-5.

<sup>40</sup> *Ibid.*, S. 3.

<sup>41</sup> Popper & Eccles, *The Self and Its Brain*, pp. 197-9. 傍点, 原文イタリック。

<sup>42</sup> Bühler, *op.cit.*, S. 18-26, 68-9.

<sup>43</sup> Popper, *Objective Knowledge*, pp. 183-90.

<sup>44</sup> ポパーの往復書簡や未公開の論文等に直接あたって、初期のポパー像を歴史的に研究したハコーヘンは、ポパーがビューラーの『心理学の危機』(1927年)を読んだばかりか、「ポパーの1928年学位論文の焦点を提供した」とまで述べている。筆者の1988年の予測が裏付けられたことになる。Malachi Haim Hacoheh, *Karl Popper: The Formative Years 1902-1945*, Cambridge University Press, 2000, p.137. この著書は、1993年に発表された学位論文から生まれたものである。注4で言及した、ポパーの学習心理学を考察したパークソンとヴェッテルシュテンの共著、*Learning from Error* は、1984年に出版されたが、その中では、ビューラーの『心理学の危機』にはまったく言及されていなかった。しかし、1992年出版のJohn R. Wettersten, *The Roots of Critical Rationalism*, Rodopiでは、『心理学の危機』が取り上げられている。pp. 132-4.



ルフ・エクシュタインのエピソードによると、学位取得のための口頭試問でビューラーは、必ず次のような質問から始めたという。「何をもちわれわれは精神分析に反対するのかね」と。

ここでは、ポパーの思想とも密接に関わる、ビューラーのフロイト批判のポイントを一つだけ紹介することにしよう。

ビューラーによれば、機能（Funktion）を看過したフロイトは、徹頭徹尾「質料思想家（Stoffdenker）」であるという。というのも、ビューラーは、フロイトの「芸術家が第一に価値を置く芸術作品のもつ形式的（formale）で技術的な特性よりも、作品の内容（Inhalt）に強く引かれていたのにしばしば気づいた」という発言を引用し、この言葉がフロイトの全生涯の仕事のモットーであって、フロイトは、「芸術作品に対するのと同様に、一言で言えば一面的に、精神的な構築物と経過に質料的なものだけを見たことを立証できる」からであるという<sup>45</sup>。そして、子どもの行動をもリビドーで説明しようとするフロイトに対して、リビドーでは説明不可能とビューラーがみなす事例を提出する。それが、アドラーとビューラーの類似点を紹介した個所で取り上げた「機能的悦楽（Funktionslust）」ともう一つ「創造的歓喜（Schöpferfreude）」である<sup>46</sup>。そして、「子どもの遊びにおける形相意志と機能的悦楽」という節で、ビューラーは、子どもたちは遊びの中でいろいろなことをするが、子どもたちが、身体、器官を実際に働かせること自体を楽しむこと、さらには、新しい遊びを創りだして喜ぶことを示す具体的事例を挙げて、フロイト理論に対する反証証拠を提起している。

しかしながら、アドラーとポパーのやりとりでも指摘したが、反証事例を提出した方がつねに正しいとは限らない。この場合も、ビューラーの反証事例に対してフロイトがリビドーでうまく説明できるかもしれないのだ。心理学者ではない私には、この問題に決着をつけることはできないが、少なくとも、ビューラーとフロイトとの間で、具体的事例を考察しながら、相互の批判的議論が行われてしかるべきであったということは言えるであろう。

しかしながら、マリー・ヤホダによると、ビューラーとフロイトは人間の発達の経験的研究という共通の課題

に取り組んでいたにもかかわらず、また17年間もの間、同じウィーンに住んでいたにもかかわらず、個人的に一度も接触の機会をもったことがないという。一般的にいて、精神分析は大学の心理学者の眼からは形而上学的で非科学的なものとみられていた。精神分析とアカデミックな心理学との統合を次の世代の研究者、例えば、Heinz Hartmann (1894-1970年)、Else Frenkel-Brunswik (1908-58年)、Ernst Kris (1900-57年)、René Spitz (1887-1974年)などが試みることになる<sup>47</sup>。しかしながら、精神分析を自分の規準によってエセ科学と決めつけてしまったポパーには、そのような試みの余地はなく、ビューラーの見解だけをそのまま踏襲することになった。

#### IV. 心理学と科学方法論

こうした背景に照らしてみると、ポパーの思想に目新しいものはほとんどなくなってしまうように思われるかもしれない。

心理学はいくつかの学派に分かれ、思想上、方法論上の対立があるが、ポパーは心理学上の知識に関してはアドラー、ビューラーの思想を受け継ぎ、他の学派の思想—例えば、連合心理学、精神分析や行動主義的な心理学—に対して否定的であることは確かである。

しかし、ポパーは自らの思想を心理学の理論として提出したわけではなかった。かれらから学んだ心理学上の知見を科学方法論に転化した点にポパーの独創性が存すると思われる。子どもは絶えず問題解決のたずさわっており、試行錯誤によって学習する。この学習理論を科学にも適用したのである。すなわち、科学者も絶えず問題解決にたずさわっており、試行錯誤によって理論を修正しながら、科学的知識を成長させるというわけである。しかし、これだけでは科学者の学習理論という心理学理論であって方法論ではない。

さらにポパーは心理学上の事実と思われるものを論理的観点から再構成した。科学者の心理ではなく、科学理論のもつ内在的性格に光をあて、「問題」を理論（全称言明で表現可能なもの）と実験、観察結果（単称存在言明で表現可能なもの）との矛盾として把握し、問題解決の試みとしての理論化（推測）と反証を通じての誤謬排

<sup>45</sup> Bühler, *op.cit.*, S. 165. ハークは、StofflicheをInhaltと関連づけて、content（内容）と訳しているが、ビューラーは、Stoffを機能（Funktion）と対比させているので、機能も含意するForm（形相）と対概念の「質料」と訳すほうが適切だと思われる。さらに、哲学用語としては、質料は、Materieだが、ここでStoffが用いられているのは、それには軽蔑的なニュアンスが含まれているからだろう。Hark, *op.cit.*, p. 46.

<sup>46</sup> Bühler, *ibid.*, S. 180.

<sup>47</sup> Marie Jahoda, *The Migration of Psychoanalysis: Its Impact on American Psychology, The Intellectual Migration*, pp. 422-40.

除による絶えざる理論修正の過程という知識の論理、およびそれを推進するための諸規則を定めた方法論として、自らの理論を構築したのである。すなわち、ポパー

の試行錯誤理論は心理学上の理論ではなく、論理的なものに仕上げられている。この点にこそポパーの独自性があるといえるだろう<sup>48</sup>。

48 科学と非科学を言明間の論理的関係の一つである矛盾に着目した論理的反証可能性の基準によって分類した場合、非科学に分類されるのは、その本性上、トートロジーの体系とみなすことのできる数学や論理学と、他の言明からまったく分離され孤立した純粹存在言明であって、アドラーやフロイトの理論は、ポパーの意図に反して、科学に分類されることになるだろう。しかしながら、ポパーは、フロイトやアドラーの理論について、端的に、テスト可能ではなく、反証可能ではないと主張していた。1974年になってもその主張は変わらず、その理由は、「フロイトもアドラーも、外的環境がどんな場合でも個々の人間の個々のやり方におけるどんな行為も一切排除せず、その理論は起こりうるあらゆることと両立する」からである（傍点、引用者）と。Schilpp, *op. cit.*, p. 985. しかしながら、『実在論と科学の目的』の「1980年加筆」では、バトリの指摘を受け入れて、「フロイト理論と両立しないある種の可能な行動、すなわちフロイト理論によって排除されている行動」の存在を認める発言をしている（傍点、引用者）。この発言は重大である。というのは、こうした行動の可能性を容認することは、その理論が、原理的にテスト可能で反証可能であると認めることだからである（したがって、フロイトやアドラーの理論がテスト可能ではなく、反証可能ではないというポパーの先の主張は間違っていたことになるのだ）。K. R. Popper, *Realism and the Aim of Science*, Hutchinson, 2007, p. 169.

他方、ポパーは、マルクスの理論については微妙な言い方をしている。マルクスの理論はかつて科学であったが、反証可能な予測がテストされ、実際に反証されたにもかかわらず、マルクス主義者たちは、理論を反証から救出しようとした結果、その科学的性格を破壊してしまったのだと。Popper, *Conjectures and Refutations*, pp. 37-8. しかしながら、ポパーのこの指摘は、言明および言明間の性質の分析から導かれる帰結ではなく、理論や証拠に対して科学者(?)が採る態度、その研究の進め方の考察から生まれるものであろう。マルクスの理論に対するのと同様の考察は、先の分析が正しいならば、フロイトやアドラーの理論に対しても可能だろうし、しかも、そうした考察の結果、それらが、ポパーの主張するようには、科学的性格が破壊された（あるいは科学的性格がそもそもなかった）という結論に到達するとは必ずしもいえないのだ。

個々の科学者や何らかの集団(学派)に属する科学者の間で、問題を共有し、理論と証拠を巡って相互に批判的議論が行われることが科学の進歩にとって望ましいであろうし、実際に理論が反証されたかどうかあるいは逆に検証されたかどうかについて、合意に到達しなかったとしても、このような相互の批判的議論から、各人が学び、理論を発展させることが可能である。今日でも心理学にはさまざまな学派が存在するが、その存在自体が問題なのではなく、学派間の批判的議論、コミュニケーションの欠如が問題なのであり、またときに論争が生じた場合、その目的が真理の探究や理論の進歩ではなく、勝敗が自己目的化することが問題なのである。